

揖保川流域委員会

第3回 情報交流分科会 議事録（概要）

日 時：平成15年4月7日（月）9時30分～12時30分

場 所：姫路市 ホテルサンガーデン姫路 3F 光琳の間

出席者：委員5名、河川管理者2名、傍聴者12名

1. 提言に盛り込む内容について

提言に盛り込む内容について意見交換が行われました。

分科会の審議結果は中元委員がとりまとめ、分科会メンバーの確認後、第6回委員会(4月14日開催予定)で報告することとなりました。

委員からの主な発言

5月に流域の3か所で行う集会について住民から意見を募集したところ、チラシの配布数86,400部に対して、意見の回収数が現在31であり、パーセンテージにすると0.03%ぐらいという状況である。このような結果が事実として出ていることを、もう少し分析して慎重に議論を試みる必要がある。

委員会は、河川整備計画がどれだけ地域に浸透していくかということ、そのための手段も同時に考えながら提言をしていってはどうか。情報発信というのは、発信する側の思いと、受け取る側の思いがなかなか一緒にならないケースが多く、そのあたりを調整する必要があり、発信する側はわかりやすい情報を流していくことが重要である。

広報において、現状では流域委員会が直接住民の戸を叩いているが、おそらく住民にとっては市町の職員が戸を叩くのと委員会が直接戸を叩くのでは反応が違う。住民に一番近いのが市や町であることを考えると、情報発信、情報交流という点で自治体がどう関わってくれるのかということを考えてもよいのではないか。

各市町には自治会、婦人会、老人会など地域活動を行っている団体があり、そういった団体と直接関わりを持っているのは基礎自治体である。基礎自治体と地域活動をしているさまざまなグループとの関係を委員会にフィードバックしてもらえば、何か新しい動きができるのではないか。

市民活動をしている方は教育委員会の生涯学習課などが業務で関わっている。また県民局の行っている地域ビジョン委員会には環境をテーマとした分科会があり、そこには非常に意識の高い方が集まっておられる。行政のそういったセクションとの連携を考えながら、もう一度ドアを叩いてみれば、地域からの意見はまだまだ出てくるのではないか。

流域市町が去年の8月に揖保川流域サミットを開催しており、国土交通省、中播磨県民局、西播磨県民局も特別委員としてメンバーに入っている。こういう素地があるのであれば、参加してもらうことも考えていかなければならない。

既に川に関するいろいろな交流会やサミット等の取り組みがあり、今後、これらとどのように連携していくのかということも大きな課題となる。うまく連携すれば、もう少し広い範囲の意見が集約できるし、委員会の情報も広がり、情報伝達力が広く、深くなっていくのではないか。

いろいろなグループの情報を集めて、彼らの活動を河川整備計画に反映していく姿勢が大事であり、それをコーディネートするのも委員会の役割だと思う。それぞれのグループと活動を一

緒に行うといっても無理なところもあるが、川をよくしようという基本的な考え方は一致しているの、原点のところから緩い連携をとっていきよように呼びかけることも重要である。

それぞれの活動を互いに横系でつなぐには、いかに協働のモデルをつくり、デザインするかということが重要なポイントになる。つまり一つ一つの活動をやっている方にもメリットがあり、なおかつ全体で一緒につくり上げるというスタンスで進める必要がある。また、情報を共有するには、実際に会って話をすることが絶対欠かしてはいけない大切なことである。

自治体と住民の方々との接点は今までもあり、自治体と河川管理者の間の接点もあるが、河川管理者と住民・自治会・NPO等の間のネットワークは弱いのではないかと思う。揖保川流域で「自治体」を含めた関係者間の緩やかなネットワークがなされていることが望ましい。

これまでも委員会の中で、国土交通省が管理する河川の区域と管理していない区域の関係の話が出ている。予算上の区切はあっても、情報の部分では上流から下流まで一貫していいのではないか。

公式な意味での流域委員会が役割を終えた後も、委員会で今出しているニュースレターを年に4回でも結構なので出していく。シンポジウムやフォーラム等のイベントを行うことも含めて、うまく提言に盛り込んでいけば、川への関心と意識向上が連携していく。

揖保川でいつ・どこで・誰が・どんなことをするのか、どんなことをやったのかわかれば、自分達で自発的にやってみようというアクションが増えてくるのではないか。

昨年、林田川の湯水期に、菅田小学校の生徒が酸素不足で困っている魚の救出作戦に取り組んだことがあった。

兵庫県では、今年度から「ひょうごe-スクール構想」というプランを行う。これは小学校、中学校、高校、大学をネットワークで接続し、教育コンテンツを集約し、連携していくもの。小学校などで川に親しむ教育が活発に行われているが、学校の中だけで閉じてしまっているのが現状である。ネットワークは、広い意味で住民や河川管理者を含む行政も併せて応援する形でつなぐ必要がある。それが実現できれば、川と密着した生活教育の場としての河川利用をみんなでも議論し、動かしていき、学ぶという流れを創出できるのではないか。

公共事業に計画段階から流域住民の皆さんに入ってもらおう。例えばビオトープや、多自然型工法などがある。一番初めからみんなで考えて、パートナーシップでやっていけば国土交通省と流域住民の皆さんとの対話も生まれてくるだろうし、川に対しての思いもこもってくると思う。洪水やその際の避難の情報について、河川管理者と流域の自治体とのしっかりした情報ネットワークをつくり、それを住民に発信してほしい。

川への関心の掘り起こしや揖保川の川づくりへの参加意識を向上するため、NPOや個人の方々に対して河川管理者が持っておられる情報をしっかりと発信してもらいたい。また、その仕組みづくりとして、ニュースレターの発行や定期的にフォーラムを開くなど情報発信のための組織をつくってほしい。

これまで縦割りで行ってた情報発信を多方面にわたり多角的に行い、さらにそれをできるだけ広く深く地域に浸透させる必要がある。また、揖保川に関するイベント、サミット、考える会など、自治体・NPO等が主体のたくさんの活動が行われており、これを一度総括し、新たに情報を多元的に流し、地域から情報を受け、それを河川計画に反映していくという基本的な手法が重要である。

2. 「(仮称)流域の声をうかがう会」の開催方法について

「(仮称)流域の声をうかがう会」の開催方法について意見交換を行い、次のことが決まりました。

- ・集会の名称は、「揖保川を語り、生かす会」とする。
- ・委員会からの報告を委員長が、参加者による意見交換の進行を委員が分担して行う。
- ・発表者の意見を踏まえ、各会場のテーマを設定する。
- ・揖保川流域で活動している団体等に、参加・意見発表の働き掛けを行う。
- ・集会への参加をより広く働き掛けるために、市町への依頼、自治会・婦人会・老人会等への依頼を行う。
- ・揖保川におけるさまざまな活動や、小中学校における取り組みの紹介を同時に行うことなども検討する。

委員からの主な発言

応募された意見の中で質問として意見を述べられている場合には、それに対して何らかのかたちで応答しないといけないのではないかと。

意見募集の文書で質問事項を挙げておられる方があり、当日参加できない方や他の会場に行かれている方は、自分の意見についてその場で聞けない方も出てくる。議事録で回答するとなるとタイムラグが発生するので、回答できる部分については文書化していただき、当日用意してはどうか。また、意見を出したが当日出席できない場合も、郵送するなどの配慮を考慮しておいた方がいいのではないかと。

この集会の基本的な考え方は住民のご意見を伺い、それを可能なかぎり計画に反映させていくということである。質問や意見に100%答えるのは難しいと思うが、その場で答えなくても無視はしないとういことを押さえておく必要がある。

意見発表の発表者を確保するため、これまでに委員会を傍聴された方、NPOなどへの働きかけができる。また、その他にも小中学校で取り組んでいる事例の発表や、自治体における整備事例や将来のプランを発表していただくということもできる。

流域委員会のメンバーの専門は非常に多彩で、バラエティに富んでいるので、委員からの発言の場を場合によっては入れてもいいのではないかと。時間の余裕があれば、そうすることにより、少し意見が膨らんでくる。

意見を発表する・しないにかかわらず、地域の自治会、婦人会、老人会、子ども会といったグループ、自治体や行政担当者へも働きかけ、集会に出席してもらい、一緒に考えいただくことにすればいいのではないかと。

参加していただく団体等の方にポスターを貼っていただく、資料を置いていただくなどにより、活動発表の場を提供することを考えてはどうか。